十　仏の教えを守り　めぐまれない人を支えてきた福祉の人　小佐々祖伝尼（一八七二～一九四八）

今から六十年前は食べるものも着るものも今ほど十分にはない時代でした。そのころ、貧しい人や気のどくな人を寺にとめ、食事をあたえたり、生活をともにしたりした人に、小佐々祖伝尼という人がいます。

現代の生活は物が豊かになり、食べるもの、着るものに不自由することはあまりありません。しかし、物は満たされても、人を思う心、人にやさしくする心がだんだん忘れられかけているのではないでしょうか。

世の中には、わけがあって両親と別れてくらしている人、病気やけがで体が不自由になった人などさまざまな人たちがいます。現在では福祉が進みたくさんの施設がつくられていますが、祖伝尼が施設を始めたころはそうではありませんでした。

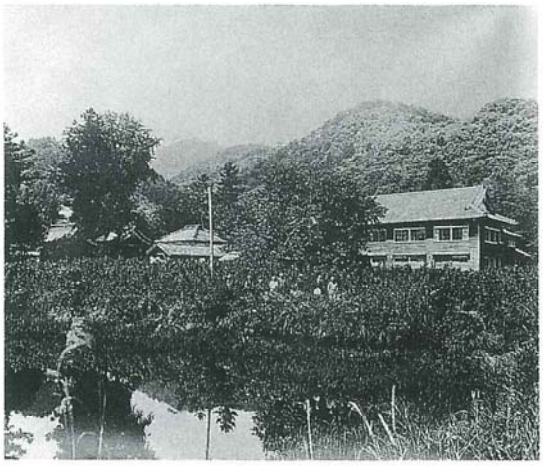
小佐々祖伝尼の胸像（藤津郡塩田町大字五町田）

祖伝尼は明治五年（一八七二）、長崎県北松浦郡小佐々村の津田家に生まれました。名前はツデ、家が寺だったこともあり女学校を卒業すると禅の道に入りました。禅の修業は、男でもいやがる厳しいものでしたが、ツデは歯をくいしばって、苦しい修業にたえました。

光桂寺全景（藤津郡塩田町大字五町田）

ツデは小さいころからとても字が上手で、書道の練習にもはげみました。また和歌も先生について指導を受けました。大正三年、義詮和尚と結婚し塩田町の光桂寺にやって来ました。光桂寺はゆいしょある寺で、山や畑も広く持っており、食べるものは十分にありました。

義詮和尚は心のあたたかい人で、だれにでもやさしく接しましたが、大正五年、病にたおれて、なくなりました。この時ツデは四十五歳、悲しみの中から立ち上がり、髪をおろして住職をつぎました。お寺の屋根の修理や、増築などの仕事も自分の手でしました。また、町の婦人会を作り、書道やさいほうも教えました。こうして祖伝尼は地域の指導者としてもかつやくしました。



昭和３年当時の施設（藤津郡塩田町大字五町田）

昭和三年（一九二八）のある日、貧しい男がこの寺にやって来ました。祖伝尼は、

「この男に食べものをあたえることはかんたんなことだが、それではこの男のためにはならない。働かないで食べものだけもらうのは、み仏の教えに反することになる。」

そう思った祖伝尼は、この男を寺にとめておき田や畑の仕事をさせました。また、ときには自分が※托鉢して歩き、※お布施をもらったりして、仏の教えをしめしました。このころは食べものがなかったり、住む家がなかったりして

托鉢して歩く祖伝尼

苦しんでいる人があちらこちらにたくさんいました。

これらのことがきっかけとなり、昭和三年施設をつくりました。これが、社会福祉事業の第一歩でした。はじめは老人だけでしたが、途中からは身寄りのない子供たちを引き取り、孤児院もつくりました。

そして、昭和十二年には高松宮殿下から農村社会事業に力をつくしたということで功労表彰をされました。

表彰状とおくられた花びん（済昭園所蔵）

このころから世の中は、戦争へと進んでいきました。食べるものや着るものは、どんどん戦地へ送られていきます。人々のくらしは、だんだん苦しくなっていきます。村の男たちも、次々と戦争にかり出され、あれていく田畑も見られるようになりました。

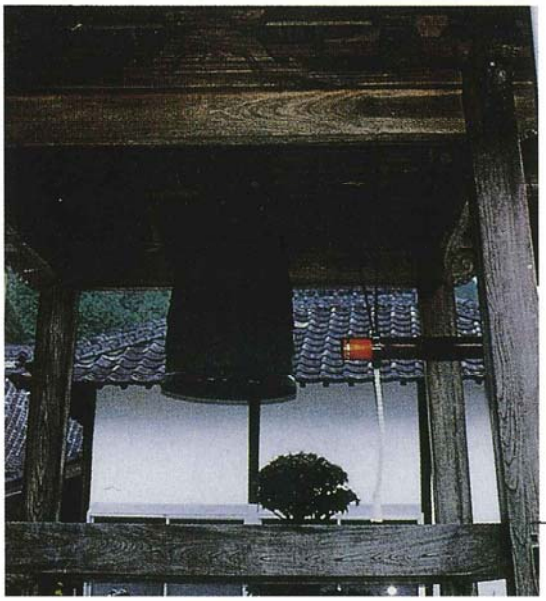
そのようなとき祖伝尼は、これまでの婦人会組織を強くし、おたがいが助け合い、協力して農業をすることをすすめました。また夜は、女の人たちが寺にとまり、古ぎれを使い家族の服を作ったりしました。

戦争がはげしくなると、それぞれの家から金物を出さなければならなくなりました。一番先に目をつけられたのが、寺の鐘でした。役人が来て、鐘を出すようにと何回もせがみました。このとき祖伝尼は、

「この鐘は平和をまもる鐘です。この鐘で武器を作ることなどできません。」

と強くことわりました。いまでもこの鐘は美しい音色をひびかせています。

今もなり続ける鐘（藤津郡塩田町太字五町田光桂寺）



昭和二十年(一九四五)、戦争は終わりましたが、まだいたるところに戦争のきずあとが残っていました。旧満州(今の中国北東部)から引きあげてきた人、長崎の原爆できずついた人たちがこの寺にたくさん来ました。多い時には子供二十人、老人十五人が寺で生活をしていました。

昭和二十一年、生活保護法による養老施設として認められ、祖伝尼はそこの初代園長となりました。

昭和二十三年、祖伝尼は、七十七歳の生涯を終えました。祖伝尼の一生は、はらんにとんだ一生でしたが、祖伝尼のようなやさしさがあったからこそ、今のような福祉施設ができたものと思います。

祖伝尼がはじめた施設は、現在三代目の園長先生に引きつがれ、たくさんの子供や老人が生活しています。祖伝尼の「一日不作、一日不食」……(一日人のためにつくさないと、食べものをどを通りません。という教え)は、園のモットーとして今もなお、みんなの心の中に生き続けています。

済昭園の全景(藤津郡塩田町大字五町田)